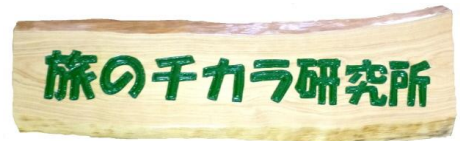


利島の旅 2022



2022年4月

旅のチカラ研究所 植木圭二

伊豆諸島の利島（としま）に夜行日帰りの1人旅で行ってきた。山が海の上に突き出たような形状の島なので平地はほとんどなく、山に登って狭い村内の家並みを歩く旅になった。



【利島】

■夜行日帰りの旅が始まる

昨年12月、私は友人と伊豆大島から神津島までの5島を巡る旅に出たが、強風のために利島だけ寄港できずに旅を終えた。利島はその特異な形状のために良い港が作りやすく、どうしても風や波の影響を受けやすい。そのためにしばしば定期船の寄港が取りやめになる。私は何とか利島に行きたいと思いながらチャンスをうかがっていたのだが、今回は直前まで待って定期船の往復の寄港が決定したので再挑戦の旅を決行することになった。

シーズンオフのこの時期に利島に寄港する船は大型客船だけで、週末の夜に東京竹芝を出航し横浜に寄港してから伊豆大島はじめ利島などに向かう。利島は旅館や民宿が少ないので週末でも宿の心配をしないで済むのもありがたい。しかし帰りの便まで滞在時間は約5時間しかなく、私はそれで足りるのかと思いつつも船に乗った。

乗った船は貨客船「さるびあ丸」6100トン、一昨年に就航した新しい船で伊豆諸島と東京竹芝を毎日往復しており、島民の生活には欠かせない存在になっている。

往路は船の中で一泊するので個室の特2等を選んだ。個室といっても畳一畳サイズよりも横幅は狭く天井に手が届くという窮屈な空間だが、寝るだけと割り切れば何の問題もない。

船は横浜を23時30分に出港して、そのまま航行すると早く着き過ぎるので、夜中に沖合で停泊して時間調整をする。夜明け前に再び動き始め、その振動により私は目が覚めた。時計を見るとまだ午前5時前、やがて船は伊豆大島に寄港して隣の利島に向かって出港する。

利島に近づくと波が結構高い。その波は栈橋に強く当たっている。それでも栈橋の上までは波がかぶることもなく、無事に接岸したのは7時40分、そしてすぐに下船が始まる。

■宮塚山を登る

利島は三角すいの形状をしており、島全体が山と言っても過言ではない。とは言っても頂上は尖ってはならず甘食パンのような形をしている。その山は標高508mの宮塚山で、登山口は2つあり、私は島の南側にある南登山口を目指し民家の中を抜けて行く。島全体が山なので平らな土地は少なく、そこに民家が密集している。平らとは言っても基本的には傾斜地で、段々畑のように土地を上手く利用して家が建っており、それらの家々の間を縫うように狭い道が通っている。

家々の中心地に利島最古という阿豆佐和気命（あずさわけのみこと）神社がある。珍しいのはこの神社の鳥居で、両部鳥居になっている。両部鳥居とは、普通に見かける2本の鳥居の柱を支えるように前後に支え柱を持つ鳥居で、あまり見る機会がない。由緒正しい神社にだけ使われると私は勝手に思っている。

私はいつものように旅の安全を祈願して、まずは神社に参拝する。



【阿豆佐和気命神社 手前に両部鳥居】

登山口までは都道 228 号の利島一周道路を歩いていく。利島一周道路と言っても車はほとんど走っておらず、ましてや歩いている人は誰もいない。風の音に混ざってウグイスのさえずりが時々聞きこえてくるくらいのもどかな空気の中を、1 人で歩くことは実に気持ちいい。歩き旅をこよなく愛する私にとっても、このような誰にも会わない歩き旅は珍しい。

船を降りてから約 1 時間歩いて宮塚山南登山口に到着する。登山道は実に良く整備されていて、急な斜面は全て木の杭で階段が作られている。標高 508m の比較的低い山だが、標高 0m から登るという島の登山はあながち馬鹿に出来ない。さらにたった 1 人の山登りは私にとってはあまり体験がなく、滑落した場合は誰も助けてくれないなどと考えると緊張してしまう。

利島一周道路ではそれなりに風が吹いていたが、登山道に入ってからには椿の林に覆われて風を遮ってくれるのがあるがありがたい。ついでに景色も遮ってくれるから単調な椿のトンネルの中を登り続ける。この山は伊豆大島の三原山（標高 550m）や神津島の天上山（標高 572m）と同じくらいの高さだが、その 2 つの山に比べて壮大でもなく変化にも富んでおらず、景色も見えないので実に地味な登山になる。

登山口から登り始めて 30 分後、意外に早く頂上の平らな広場にでる。

登頂の証とばかりに記念撮影をしていると、女性が 1 人登って来た。いわゆる山ガールという感じの人で、どちらからともなく「こんにちは」と声を掛ける。今回の登山、いや今回の旅で初めて人と言葉を交わした。そして相互に写真の撮りっこをして、彼女から「南登山口から来たのですか？」と聞かれる。私は「そうです南ですよ」と答えると、彼女は「私は東から登りましたが、ほとんど階段でした」と暗に辛かったと言っている。私は「南はそうでもなかったですよ、今度は南に降りるといいでしょう。私は東に降ります」と言い、お互いに「では、頑張って」と言いながら頂上を後にする。

頂上をやや降りた所に宮塚山展望台があり、3 階建ての立派な木造の展望台が建っている。この木造の展望台はこの山、この島には似合っているように感じる。ここにコンクリート製の展望台があつては興ざめするに違いない。

展望台からの眺望は、晴れていれば絶好のビュースポットになるようで、利島村の中心地や港、そして海の向こうには伊豆大島や富士山が見えるらしい。残念ながら本日は曇り、それも今にも雨が降りそうな天気なので海の向こうは真っ白で何も見えない。それでも村の中心地の家並みと栈橋だけは見る事ができた。



【宮塚山頂上】



【宮塚山展望台】

東登山口の方面に歩き出すとすぐに階段になる。先ほどの山ガールが言っていたように階段が延々と続く。確かにこれを登って来たとなるとかなりきつかっただろう。私は登りに南登山口を選んだことを幸運だったと思いながら、かなり急な階段を降りていく。降り始めて約 20 分で利島一周道路に出る。

■利島村を巡る

利島一周道路で島の中心地を目指して歩きはじめる。立派な道路なのに相変わらず車は走っていない。この辺りはどこまで行っても椿の林が続いており、島の 8 割は椿に覆われていると言われていることが十分に理解できる。この島の産業は農業と漁業だとパンフレットに書かれているが、農業はいわゆる農作物ではなく、もちろん椿だ。椿から取れる油は品質も生産量も日本トップレベルだという。

その椿を収穫して運ぶためだろうか、椿の林のいたるところに荷物を運ぶモノレールの軌道がある。現在使われているかいないかは分からないが、そのレールを走る運搬車両もビニール製の車庫に置かれている。



【椿の畑と モノレール】

島の中心には小中学校、村役場、診療所など人口 300 人の生活を支える施設がひとつおりそろっている。驚いたのは郵便局で、本日は日曜日なのに開いている。郵便局の制服を着たおばさんが出てきたので、私は「日曜日なのに郵便局やっているのですね」と声を掛けてみる。すると彼女は「ここには銀行がないからね、それに船が着けば配達もするよ」と答えてくれる。どうやら彼女はこれから配達に向かうようで、手には郵便物の入っているカバンを持っている。

確かにこの島の金融機関はこの郵便局のみ、郵便物は船が着いた時だけ配るのだから、本土の郵便局とは全く異なる。

そうこうしているうちに雨がポツポツと降り始める。

多少の寒さを感じ、雨宿りを兼ねて朝食兼昼食を食べさせてくれる飲食店を探すが見つからない。パンフレットによればそのような店が 2~3 軒あるはずで、ようやく 1 軒を見つけるが日曜日なので開いていない。この島民の生活は基本的には自給自足で、観光客も少ないこの島にはそもそも外食の需要がないのだろう。

それでも食料品を売っている店をかるうじて見つける。店を覗き込むと品数は少なく軽食のようなものは置いていない様子だ。そんなことをしているうちに小雨はやがて本降りになり、私は慌てて近くの神社に逃げ込んだ。

パンフレットを見ると、この神社が伊豆諸島では唯一流鏑馬（やぶさめ）が神事として行われている八幡神社だと判明する。この神社で流鏑馬が行われるきっかけになった出来事は、伊豆大島に流されていた源為朝が利島に来て神前に的射を奉納したという。もう千年も前の出来事で、そんなに長く続いているのかと感心する。そしてこの神社の鳥居も両部鳥居になっている。

雨が小降りになってきたので、先ほど見つけた食料品店で少しの食べ物とアルコール類を買い込み、東海汽船の待合所に早めに入り、ひっそりと1人宴会を始める。

周囲を見渡すと、10人くらいの人が集まっている。地元民や釣り客がほとんどのようで、私のような観光客はいない。

天候不良で船の到着が遅れているというアナウンスが入る。定刻より20分程遅くなるとのことで、利島での1人宴会は1時間以上も続き、さらに帰りの船の中でも1人宴会が続く。



【利島の栈橋 船尾から見たさるびあ丸】

■利島の魅力とは

時間もあって電波も繋がるので1人宴会をしながらインターネットであれこれ調べながら利島の魅力について考えてみることにした。

そして面白いデータを見つける。それは利島の人口が、ここ100年くらい概ね300人と変わっていないことだ。詳しく見ると戦争中は疎開のためか400人くらいに増えており、高度成長期には労働人口が島外に流出したのか250人くらいになってはいるが、それを除けばほとんど300人だ。むしろここ20年くらいは微増している。これまで私が訪問してきたどの島でも長期人口減少が続いているが、その中であって極めて珍しい。

人口が増えない理由は、これといった産業がないことだろう。長崎県の端島（軍艦島）は石炭産業で繁栄して、一時は日本一人口密度が高い島になった。その後は石炭産業の衰退で現在は廃墟になってしまった。石炭産業と島の栄枯盛衰が完全に連動した例だろう。

観光産業についても伊豆諸島の他の島に比べて明らかに見劣りする。前回の伊豆諸島の旅で巡ってきた島々にはそれなりに観光名所があり、温泉、海水浴、登山、サーフィンなどで昔は賑わっていた。今もその名残はあるが、昔ほどでもないで観光産業は衰退している。利島は観光ブームに乗らない、いや何もないから乗れない。それが幸いしてか観光産業の衰退もない。

逆に人口が減らない理由は、地味ながらも生活基盤がしっかりしているからだろう。椿油という爆発的に繁盛もしないが衰退もしない産業があり、漁業は産業というよりも自給自足のためのものになっている。そして何よりも裕福な東京都がバックについているから福祉が手厚く、住民の生活は安定している。

そういった背景もあるが、若者が島を出てしまったらどうしようもない。若者たちが島に留まるか、あるいは一旦出ても戻る理由が上記以外にもあるのに違いない。

それは基本的には島民はみんな利島が好きなのだろう。自然に囲まれ観光地化されていない島だからかもしれない。集落は分散しておらず狭い土地に密集していきから島民の結束も堅い。300人という人数はまとまるにはちょうど良いのかもしれない。

その一例として利島の正月が面白いらしい。大みそかの夜になると阿豆佐和気命神社の境内には島民が集まりお神酒をいただき、0時を過ぎて年が明けると拝殿の太鼓が打ち出され、流鏝馬の矢取りの子ども「ジックワ！」という声を合図に火がつけられ、その火をジックワ火と呼ぶという。火を囲んだ人たちによって「ジックワ火の歌」が歌われる。近くの寺で打たれる除夜の鐘の音に呼応して太鼓は108回打たれる。厳かな興奮に包まれるという。三が日は山廻りが行われる。米とお神酒を持って一番神様、二番神様、三番神様の順に社を参拝してお供えするという。

我が道を行くという感じのする利島には古き良き日本が生活感たっぷりで残っている。

利島に渡る前は滞在時間が足りないかもしれないと心配していたが、時間的には問題なかった。山以外に名所旧跡というものがほとんどないからだろう。しかし、もしも何もない古き良き日本の生活を体験したいならば、泊まりで来ることがおすすめだ。それも正月が面白そうだ。

■旅の記録

行程は2022年4月2日（土）～4月3日（日）で実施され、詳細行程を以下に記す。

- ・1日目 22時自宅を出て、23時30分出港の東海汽船「さるびあ丸」横浜港大棧橋から乗船特2等寝台で就寝、約8時間後に利島港に入港
- ・2日目 朝7時45分に下船し、阿豆佐和気命で参拝、家並みを抜けて島の南側へ、8時45分に宮塚山南登山口到着、登山開始し30分後に登頂、宮塚山展望台、9時40分東登山口に下山、ウスイゴウ園地、椿畑、小中学校、村役場など見物、雨宿り兼ねて八幡神社参拝、売店でアルコール類を買い込み東海汽船待合所で待機船の遅れで定刻より20分遅い13時に乗船、船内レストランで昼食
18時30分横浜港に入港し帰宅

費用は約1万円、内訳は乗船券が7720円、詳細は以下に示す。

- ・交通費 横浜→利島7120円（特2等）、利島→横浜4740円（2等）を株主優待で7720円
自宅から大棧橋までの交通費往復約1000円
- ・その他 船内での昼食、ビールなど